



仲介業を通じた都市労働市場再編に関する地理学的研究——1970年代以降の地方都市におけるブラジル人労働者の移動と定着の過程を中心に——

小谷, 真千代

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2021-09-25

(Date of Publication)

2025-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8119号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008119>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論文題目

仲介業を通じた都市労働市場再編に関する地理学的研究

—1970年代以降の地方都市におけるブラジル人労働者の移動と定着の過程を中心に—

氏 名 : 小谷 真千代

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 原口剛 准教授

(副) 藤田裕嗣 教授

(副) 樋口大祐 教授

本研究では、1970年代以降の地方都市におけるブラジル人労働者の移動と定着の過程を中心に、仲介業を通じた都市労働市場の再編過程を検討してきた。

第1章では、D.ハーヴェイの都市空間の生産の議論を手がかりとして、近代以降の日本における労働市場の再編が、都市空間の生産と労働力移動の管理を伴うものであることを示した。まず、近代における工業化／都市化によって、湾岸部大都市に大規模な労働力需要が生じ、「斡旋人」、「手配師」などと呼ばれた仲介業者を通じて農村から大量の労働力を吸収したことを示した。つぎに、戦後恐慌における失業者救済という文脈のもと、国家が土木事業とともに、職業紹介や移民政策など労働力移動の管理に乗り出し、総力戦下において重工業化、都市開発、労働力移動の管理を強めていったことを指摘した。つぎに、戦後重工業への集中的な資本投下を通じて大都市のインフラを整備するとともに、営利目的の仲介業を規制しつつ、広域紹介、集団赴任など農村からの大規模な労働力移動を促進する制度を整えていく過程を整理した。そのうえで、1970年代以降は、大都市への労働力供給地でありながら労働力需要地でもあるという矛盾した都市空間——「地方都市」を生み出しつつ、海外からの労働力流入と営利目的の仲介業規制緩和を通じて労働力移動を促したことを示した。その結果、国家による工業化の推進とインフラ整備には、つねに労働力移動の管理が伴っており、局地的な資本投下による不均等な都市空間の生産が労働力移動を生みだし、またその労働力移動こそがさらなる都市空間の拡大を促進することが明らかになった。

第2章では、1970年代半ばを境に資本や労働力が流出していった湾岸部の大都市に注目し、D.ミッチェルの「労働の景観」論を手がかりとして、神戸港の労働市場と都市空間の再編過程を検討した。まず、神戸が開港以降急速に工業化／都市化されていくなかで、仲介業者を通じて農村から労働力を吸収しつつ、港湾運送や土木建築、そして工場生産の下層部へと配置される過程を示した。つぎに、東川崎町が貿易や造船の中心地として多くの新規参入者たちを引きつけ、労働市場の上層部から下層部までさまざまな労働者たちが労働の景観を形作ったことを示した。それは単に労働／生活の拠点であるだけではなく、労働者達がうめこまれた下請構造や仲介業を介した雇用の矛盾や緊張、そして対立が表出する場だったと言えるだろう。そのうえで、1980年代以降のウォーターフロント再開をとりあげ、産業の衰退とともに物理的景観が破壊されショッピングモールへと再編されることで、「新しく生まれ変わる港」や「8時間労働を導入した川崎造船所の偉大さ」という表象が生み出され、神戸港湾の景観がはらむ資本と労働という社会関係、それをめぐるコンフリクトの歴史が打ち消されていく過程を明らかにした。

ある場所の衰退が別の場所での発展と連動しているという地理的不均等発展の議論をふまえるのなら、神戸港において消失していくように見えた労働の景観と社会関係は、どこかに蒸発したわけでは

なく、別の場所で生産され続けていると考えられるだろう。そこで第3章、第4章では、1970年代以降急速に資本と労働が流入した内陸部農村に焦点を移し、岐阜県美濃加茂市を事例として、都市労働市場の形成過程を検討した。

第3章では、1970年代半ば以降に台頭した業務請負業者に着目し、彼らがいかにして地方都市の労働市場における労働力供給のインフラを整備していったのかを検討した。まず、美濃加茂市が近隣大都市からの下請工場進出を通じて工業化／都市化されるなかで労働力の供給地かつ需要地と化し、業務請負業者を通じて遠隔地から労働力を吸収する過程を示した。つぎに、業務請負業を営む人びとの聞き取り調査から、労働者として流入した人びとが業務請負業者の社員となり、独立することで、美濃加茂市周辺に小規模な業務請負業者が集積していく過程を示した。また、業者への聞き取り調査からは、業務請負業者による労働力供給が、単に労働者と企業を結びつけるだけではなく、住居と交通手段という物理的／社会的なインフラの整備を通じて実現されることを示した。さらに、住居と送迎というインフラの維持は、単に建物や車両を物理的に維持という以上に、どこからどこへ労働力を供給するのか——つまり、労働力供給のスケールの生産において決定的な意味を持つことを明らかにした。以上のことから、業務請負業者は、すでに国土開発や工場進出によって完成された周辺の都市空間——「地方都市」へと日系人を送り込んだというよりも、むしろ、業務請負業者が日系ブラジル人を呼び寄せ、彼らの生活と労働のためのインフラを整備することを通じて、フレキシブルな労働力の供給にふさわしい都市空間を生産していたと言える。

第4章では、業務請負業者の営業および求人活動を知識の生産過程として捉え、業務請負業者がいかなる戦略のもとブラジル人労働市場を拡大するのかを検討した。まず、業務請負業者の日々の事業展開を通じて、仲介業者が労働者や企業からの問い合わせを待つ受動的な存在ではなく、みずから積極的に労働市場を切り開く存在であることを示した。つぎに、2008年のリーマン・ショック以降拡大した娯楽遊戯機器と介護業をとりあげ、業務請負業者がより不安定な部門へと市場を拡大する過程を論じている。そのなかで、業務請負業者は権利主張を控え、不満を見せず、諍いを起こさず、常に笑顔でやさしく一生懸命に働く「よい」移民労働者のイメージをもとに、「トラブルを起こすブラジル人」、「まじめでよく働くブラジル人」という言説を生み出しながら、市場拡大のチャンスを切り開いていることが明らかになった。さらに、こうした言説は、下請構造の下層部のみが集められた地方都市の零細企業・零細業務請負業者・請負労働者の三者関係のもとに生み出されたものであり、「よい」労働者のイメージの流通は、こうした社会関係を再生産する役割をも果たしうることを指摘している。

第5章では、さらにブラジルから上記のような地方都市へと労働者を斡旋する仲介業者に焦点をあて、ブラジルにおける労働者斡旋のネットワークの社会・空間的拡大過程を検討した。まず、デカセギ斡旋

によって日系の旅行社が活発化するなかで、電話帳掲載の旅行社立地はサンパウロ中心部へと集中しつつも、サンパウロ市内、サンパウロ州内、そして全国へと拡大したことを示した。つぎに、サンパウロ市リベルダーヂ地区で旅行社を営む人びとの参入経緯から、旅行者の増加にデカセギ斡旋業の集中と分散という二重の空間的過程が伴っていたことを示した。リベルダーヂには日系人人口や商店の集中など初期の斡旋業が事業を展開しやすい条件が整っており、さらに既存の写真館などが旅行社向けサービスを提供しはじめたことで、旅行社が集積したと思われる。一方で、それは労働者の奪い合いという事態を生じさせ、プロモーターを通じたネットワークの地理的拡大を促したと考えられよう。さらに、サンパウロの別地区やサンパウロ州内外の旅行社の事業展開からは、旅行社がどこに立地していようととも他社との競争関係におかれていると同時に、このネットワークは地理的に不均等なカタチで広がっていることを指摘している。そのうえで、各社が自らの斡旋ネットワークから別の場所にある旅行社・プロモーターを切り離すことで新たな事業のスケールを生み出し、不況を切り抜けてきたことを論じた。本章の検討を通じて、デカセギ斡旋ネットワークの地理的不均等が、旅行社による新たな斡旋スケールの生産の原動力であると同時に結果でもあり、この絶えざるスケールの生産こそが、デカセギ斡旋ネットワークを維持していることが明らかになった。

以上の事例をふまえるのであれば、まず、都市労働市場の形成には、つねに生産工程の末端部を特定の空間へと集めようとする過程が伴っていると言えよう。近代以降、急速に工業化した湾岸部大都市は、周辺の農村や植民地から労働者を吸収しつつ、生産工程の末端部へと配置していった。一方で、下請工場進出を通じた内陸部農村の都市化もまた、生産工程の末端部が農村という特定の空間へと集められる過程として捉えられうる。ただし、そこに生み出されたのは、かつての大都市とも農村とも異なる、労働力供給地でありながら需要地でもあるという矛盾した都市空間——「地方都市」であった。

急速に工業化された地方都市において、労働市場の仲介業は、ただ労働者と雇用者を結びつけるだけでなく、自ら市場を開拓しつつ、都市の物的・社会的インフラを整備する役割を担っていたと言えよう。そして彼らは、自らが生み出したインフラの整備と維持を通じて、自身の労働力供給のスケールを拡大していたのである。こうした地方都市の仲介業者のうごきはまた、労働力供給地で活動する仲介業者らの斡旋ネットワークの収縮とも連動していく。このことをふまえるのであれば、通常ブラジルと日本、あるいはグローバルなスケールから捉えられる日系ブラジル人労働者らの移動と定着は、各地の仲介業者が生産する無数のスケールから成り立っていると言えるだろう。つまり、現代の地方都市に立ちあられる日系ブラジル人の労働市場は、国家による開発や移民・労働政策によってグローバルに展開しているというだけでなく、労働力の供給地や需要地における仲介業者による絶えざるスケールの生産を通じて、マルチスケールに展開するのである。以上、神戸、美濃加茂、サンパウロの事例の検討を

通じて、本研究は仲介業者を通じたマルチスケールな都市労働市場の再編過程を実証することができた。